早稲田大学　教育・総合科学学術院　学術研究（人文科学・社会科学編）第六十二号　一―一八頁、二〇一四年三月

侵食する語りの起源

―夏目漱石『彼岸過迄』論

伊藤かおり

はじめに

夏目漱石『彼岸過迄』（明治四五）は、「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」「結末」の七章から成る連作形式の小説である。「風呂の後」「停留所」「報告」は、田川敬太郎の視点に寄り添った三人称の語りによって物語が進行する。これに対し、主に作中人物による一人称の語りによって進行する「須永の話」「松本の話」と、先の三つの章の間には、物語構造上の亀裂が早くから指摘されてきた。(1) 近年では、「須永の物語として読むか、敬太郎の冒険譚として読むか」という評価の二分化を乗り越えようとする新たな試みが提出されているものの、(2) その間に置かれた「雨の降る日」を含め、『彼岸過迄』全体の構造を有機的に結びつけ、説明したものはない。(3)

前半部と後半部の間を隔てるかのように配置された「雨の降る日」は、探偵的行為を手放した敬太郎がはじめて〈聴き手〉として姿を消し、千代子によって語られたはずの松本家の〈悲劇〉が三人称の語り手を経由して提示される章である。本論は、この入れ子型の語りを経由することで、「雨の降る日」と個々の断章とがどのように共鳴し、接続し得るかを論じる。これまで、「短編連作」という形式や人称をめぐる問題から議論されてきた『彼岸過迄』の構成の問題に対して、本論では、「個人の語り（話）」が個々の断章を生成する一人称／三人称の語りに織り込まれることの効果に着目する。それらが交錯することの効果を分析することによって、『彼岸過迄』の構造全体を結びつける糸を浮かび上がらせ、テクスト内における〈物語ること〉と〈演じること〉の相同性を明らかにする。

一、母になる遊び

「雨の降る日」は、松本が語ろうとしない〈雨の降る日に来客を断る理由〉を千代子が敬太郎に話すことで展開していく章である。しかし、この章において、千代子の語りが一人称の位置を占めることはない。山下航正氏は、「雨の降る日」が自分に不利な発言を隠そうとする傾向がある話者と、それを防いだ三人称の語り手の存在によって、千代子の「心の美しさ」（正的要素）と「無神経さ」（負的要素）の両面を提示することを可能にしていると指摘した。[4] たしかに三人称の語り手の介入は、千代子が語る内容を相対化させ、その信憑性を疑わせる契機となっている。

たとえば、〈雨の降る日に来客を断る理由〉を敬太郎が聞くことになったきっかけは、須永家を訪れた千代子が「不図松本の評判」を口にしたことにある。しかし、「あの叔父さんも随分変つてるのね。雨が降ると一しきり能く御客を断わつた事があつてよ。今でも左うか知ら」（「雨の降る日」一）と語る千代子の言葉は不自然だ。なぜなら、松本が来客を断る理由をその場にいる誰より熟知しているのは千代子のはずだからである。「雨の降る日」を最後まで読めば、章の冒頭における「謎」の提示が千代子に宵子の物語を再び語らせるための誘導であることがわかる。しかし、千代子はなぜ、「繰り返し」語る必要があったのだろうか。また、その内容は、千代子が松本夫婦の末娘をいかに可愛がっていたかが中心となっている。だが、千代子が宵子をどのように、どれくらい可愛がっていたのか、どんな風に宵子を弔ったのかを語ることは、「松本がなぜ雨の日に来客を断るのか」という問いに直接関わりのないことである。それにもかかわらず、なぜ千代子は宵子と自分との関係を過剰に語る必要があったのだろうか。

「宵子さんかん〳〵結つて上げませう」と云つて、千代子は鄭寧に其縮れ毛に櫛を入れた。それから乏しい片鬢を一束割いて、其根元に赤いリボンを括り付けた。宵子の頭は御供の様に平らに丸く開いてゐた。彼女は短かい手をやつと其御供の片隅へ乗せて、リボンの端を抑へながら、母のゐる所迄よた〳〵歩いて来て、イボン〳〵と云つた。母があゝ好くかん〳〵が結えましたねと賞めると、千代子は嬉しさうに笑ひながら、子供の後姿を眺めて、今度は御父さんの所へ行つて見せて入らつしやいと指図した。（中略）書見を一寸已めた松本が、あゝ好い頭だね、誰に結つて貰つたのと聞くと、宵子は頸を下げた儘、ちいちいと答へた。ちい〳〵と云ふのは、舌の廻らない彼女の千代子を呼ぶ常の符徴であつた。後に立つて見てゐた千代子は小さい唇から出る自分の名前を聞いて、又嬉しさうに大きな声で笑つた。

（「雨の降る日」二、傍線引用者）

千代子は五人のうちで、一番この子を可愛がつてゐた。来る度び

に屹度何か玩具を買つて来て遣つた。或時は余り多量に甘いものを当てがつて叔母から怒られた事さへある。すると千代子は、大事さうに宵子を抱いて縁側へ出て、ねえ宵子さんと云つては、わざと二人の親しい様子を叔母に見せた。叔母は笑ひながら、何だね喧嘩でもしやしまいしと云つた。松本は、御前そんなに其子が好きなら御祝ひの代りに上るから、嫁に行くとき持つて御出でと調戯つた。

（「雨の降る日」二、傍線引用者）

千代子による宵子の可愛がり方に着目すると、いくつか奇妙な点が挙げられる。ひとつは、自分が宵子を可愛がる様子を周囲の人間の見せようとしていること、そして、宵子を独占しようとしていることである。千代子は、ただ宵子の髪を結うことだけでは満足していない。宵子の母である御仙の賞賛の言葉だけでは飽き足らず、父松本に見せてくるよう宵子に「指図」するのである。

勝田和學氏は、「雨の降る日」の「芭蕉」をめぐる会話の中で、「恒三」「叔父さん」「貴方」と、千代子が松本の呼称を巧みに使い分けていることに着目し、千代子が当時の言語規範を遵守しながら、叔父と姪の関係というよりも、男女の対話として呼びかけていることを指摘している。[5] 勝田氏が述べるように、千代子が「一人の男として意識している」とまでは言いきれないものの、千代子が松本を「貴方」と呼び、自分と対等な異性として見立てていることは注目に値する。

千代子の宵子を可愛がる一連の行為は、誰かに見せることを重視している点でパフォーマンス性を有している。それは一見、松本を夫に、宵子をわが子に見立てたごっこ遊びにも見える。[6] しかし、これは幼い子どもが年下の幼女とともに遊びの場を形成している場合と切り分けて考えねばならない。なぜなら、千代子は実際に宵子の足袋を網み、上手に髪を結い、食事の世話をすることができるからである。千代子に宵子の世話を代行するだけの能力があると周囲にみなされていたからこそ、千代子は宵子の世話にかかわる御仙や下女の役割を自分のものにすることができたのである。

しかし、宵子の死を迎える直前まで、千代子の行いは嬉々として母親役を楽しむものだった。家族の目が届かない別室では、食事の介助をする役目にあったにもかかわらず、宵子に「色々な芸を強い」、その反応を「面白がつて、何遍も繰り返さして」いた。先に挙げた引用を振り返ってみると、そこには〈宵子を可愛がる私〉をアピールし、宵子を自分の思い通りにコントロールすることを楽しむ千代子の振る舞いが浮かび上がって来る。[7] この千代子による一連の振る舞いは、「無神経」というよりも、むしろ奇怪である。なぜなら、千代子の欲望が満たされるためには、宵子の服従と犠牲が不可欠だからだ。そうまでして、千代子は宵子を可愛がる自分をアピールすることで、何をしようとしていたのだろうか。

「須永の話」には、千代子が須永への恋心をほのめかす場面が何度か語られている。その中心は須永が大学二年の春から三年の夏にかけてのことである。この間、千代子は須永家の嫁として「妾行つて上げ

ませうか」と発言して千代子の母である田口の細君と須永を驚かせている。

「妾行つて上げませうか」

僕は彼女の眼を深く見た。彼女も僕の顔を見た。けれども両方共其処に意味のある何物をも認めなかつた。叔母は千代子の方を振り向きもしなかつた。さうして、「御前の様な露骨のがら〳〵した者が、何で市さんの気に入るものかね」と云つた。僕は低い叔母の声のうちに、窘なめる様なまた怖れる様な一種の響を聞いた。千代子は唯から〳〵と面白さうに笑つた丈であつた。

（「須永の話」七、傍線引用者）

田口の細君は娘を「露骨のがら〳〵した者」と評すことで千代子の申し出を一蹴している。注目すべきはこの「事件」の後の「或日の晩」、千代子が須永を田口家に引き止めて「習ひ立ての珍しい手料理」をふるまっていることである。それは田口の細君が指摘した、「露骨」で「がら〳〵した」イメージとは異なる、千代子の家庭的な一面を見せる行為である。[8] 以後、千代子は須永の前で「冷やかし」や「悪口」を慎み、結果的として須永に「可憐な心」を生じさせている。

其の日彼女は病気の所為か何時もよりしんみり落ち付いてゐた。僕の顔さへ見ると、屹度冷かし文句を並べて、何うしても悪口の云ひ合を挑まなければ已まない彼女が、一人ぽつちで妙に沈んでゐる姿を見たとき、僕は不図可憐な心を起した。夫で席に着くや否や、優しい慰藉の言葉を口から出す気もなく自から出した。すると千代子は一種変な表情をして、「貴方今日は大変優しいわね。奥さんを貰つたら左ういふ風に優しく仕て上げなくつちや不可ないわね」と云つた。

（「須永の話」九、傍線引用者）

須永が語る一人称の視点からは、普段と異なる千代子の「落ちついた」振る舞いと、田口の細君を困惑させた例の一件とが結びついていないように見える。しかし、「奥さんを貰つたら左ういふ風に優しく仕て上げなくつちやいけない」と語る千代子の言葉が、自分以外の誰かが須永家に嫁ぐことを想定していることは明らかだ。「須永の話」において語られる一連の千代子のふるまいと、「雨の降る日」で語られた千代子のふるまいとの時間的接続を照らし合わせれば、右の引用の千代子の発言が田口の細君の言葉を意識したものであることがわかる。

二人は殆んど一所に生長したと同じ様な自分達の過去を振り返つた。昔の記憶を語る言葉が互の唇から当時を蘇生らせる便りとして洩れた。僕は千代子の記憶が、僕よりも遥かに勝れて、細かい所まで鮮やかに行き渡つてゐるのに驚ろいた。彼女は今から四年前、僕が玄関に立つた儘袴の紐を彼女に縫はせた事迄覚えてゐ

た。其時彼女の使つたのは木綿糸でなくて絹糸であつた事も知つてゐた。

（「須永の話」九、傍線引用者）

「自分達の過去」の記憶を語り、「互の唇から当時を蘇生らせ」る中で、千代子が須永に思い出させたのは須永の袴の綻を千代子が縫ってやった記憶である。その記憶自体は、お互いが〈結婚〉を意識する以前のたわいない思い出にすぎない。しかし、この記憶を両家の親族が二人の結婚相手を実際に検討し始めた時期に思い出させることは、千代子を身の回りの世話をする未来の妻に重ねて想像させる効果がある。このように、「須永の話」において断片的に語られる千代子の誘いは、一貫して千代子が須永の妻にふさわしい女であることを示そうとしている。須永との結婚を阻む田口の細君の批評を覆し、それを須永や周囲の者たちに承認させることは、千代子と須永の結婚を可能にする現実的な方法である。

百代子が姉の夫にどうかと須永に話した高木を招いての鎌倉旅行は、須永が大学三年から大学四年に進級するの夏のことだ。宵子の死が大学四年の秋ごろだとすれば、[9] 千代子が家族によって今にも片づけられようとしていていた時期である。その一方で、嫁に行ってもいいと思っていた須永は一向に動こうとしないのだ。千代子が〈宵子を可愛がる自分〉の見せ方にこだわるのは、家庭に適合する能力をアピールするためだけではない。千代子が周囲を巻き込んだ一方的な遊びに耽ることは、制度的に子どもを持つことを禁じられた環境の中で、母になること、妻となることが可能かどうかを自己確認するための行為でもある。御仙が語るように、宵子の死の原因が不明である以上、その責任を千代子が負う必要はない。しかし、自分の管理の下で宵子を死なせてしまった事実は、母を演じていた千代子が宵子の〈本当の母〉でないこと、〈本当の母〉になれなかったことを突きつけるのである。[10] 宵子の死は千代子にとって、母となる資格を脅かす問題である。だからこそ、千代子は宵子の死の原因が自分にないことを弁明し、繰返し語り聞かせる必要があったのだ。

敬太郎が「雨の降る日」の話に耳を傾けるとき、そこには須永も同席している。千代子が親族の一人一人に宵子の死の経緯を語り、今なお敬太郎にその話を語り聞かせるのは、須永と須永の周囲の人間に〈宵子を愛した千代子の物語〉を刷り込むために他ならない。千代子の証言が反復され、より多くの人に共有されることで、個人の物語は〈事実〉であるかのように機能するのである。

千代子は広い本堂に坐つてゐる間、不思議に涙も何も出なかつた。（中略）車の上で、切なさの少し減つた今よりも、苦しい位悲しかつた昨日一昨日の気分の方が、清くて美くしい物を多量に含んでゐたらしく考へて、其時味はつた痛烈な悲哀を却て恋しく思つた。

（「雨の降る日」六）

宵子の葬儀において、千代子は「泣けない自分」を発見している。

「泣けないこと」自体が問題なのではない。「泣くこと」によって〈人一倍悲しんでいる私〉を示し、宵子と自分との精神的な親密さを確認すること。これができなかったため、千代子は自分が「非情だ」とみなされる前に、「泣かない誰か」を批判するのである。

「貴人の様な不人情な人は斯んな時には一層来ない方が可いわ。宵子さんが死んだつて、涙一つ零すぢやなし」
「不人情なんぢやない。まだ子供を持つた事がないから、親子の情愛が能く解らないんだよ」
「まあ。能く叔母さんの前でそんな呑気な事が云へるのね。ぢや妾なんか何うしたの。何時子供持つた覚があつて」
「あるか何うか僕は知らない。けれども千代ちゃんは女だから、大方男より美くしい心を持つてるんだらう」
（「雨の降る日」七）

この二人の会話は、千代子の自問自答のようである。千代子は泣けない自分の疚しさを隠すため、理不尽なまでに須永を責め立てている。これに対し、戸惑う須永の回答はもっともだ。「まだ子供を持つた事がない」のだから、「親子の情愛が能く解らな」くても、不思議ではない。これは母の情愛と等しい悲しみを感じ、それを周囲に示さねばならないと焦る千代子に、「解らな」くていいことを示す言葉でもある。だが、千代子はこれに納得しない。千代子は須永を自分の代わりに「不人情」という言葉へ押し込め、自分にぶつけるべき言葉を須永に向けて放つことで、「泣くべき」側に自らを位置づけるのである。その結果、「美しい心を持つている」と須永の口から語らせることに成功している。しかし、そのようにして宵子の死後も頑なに守ろうとした、〈宵子をわが子のように愛す千代子〉の虚像は、この章の末尾の御仙の言葉で突き崩されてしまう。

「叔母さん又奮発して、宵子さんと瓜二つの様な子を拵えて頂戴。可愛がつて上げるから」と述べる千代子に対し、「宵子と同ぢ子ぢや不可ないでせう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違つて代りが出来たつて、亡くしたのを忘れる訳にや行かないんだから」（「雨の降る日」八）と語る御仙の言葉は、母の役割を弄ぶ千代子と自分とのを差異を知らしめる一方で、子を奪われた母の恨み言のようにも読める。千代子が宵子を独占するためには、宵子と最も親密な関係にある母親御仙を排除する必要があった。先に挙げた、千代子が大事さうに宵子を抱く場面では、千代子が宵子との親密な様子を御仙に見せつけていた。これに対し、御仙は笑いながら「喧嘩でもしやしまいし」と答えている。千代子のふるまいが母親の「型」をなぞる真似事だからこそ、御仙は笑いながら応えるしかない。だが、御仙が「喧嘩」という語を用いていることからもわかるように、千代子が宵子を抱きかかえてみせるしぐさは御仙に対する敵意の表れとして受け止められている。これは宵子と一番親密な関係にあるはずの母親に成り代わるような、御仙のポジションを奪っていく千代子の宣戦布告を示す場面なのだ。

「雨の降る日」における〈悲劇〉は宵子の死そのものにあるのではなく、千代子によって仕掛けられた象徴的な〈子を奪う遊戯〉が、物理的な略奪に反転してしまったことにある。しかしながら、『彼岸過迄』に書き込まれた〈子を奪う女／奪われる女〉の構図は、千代子と御仙に限ったものではない。かつて須永家から小間使いを追い出し、その子が男子だと知った途端に自分の子どもとして引き取ってしまった須永の母と実母御弓もまた、須永を奪い、奪われた女たちである。「自分に子が出来ないのを苦にして」いた須永の母は、実母の存在を須永に隠しているだけでなく、千代子との結婚によって物理的な血縁関係を実現しようと暗躍してきた。このことが明らかになるのは、「須永の話」、「松本の話」の根底に流れている須永の母の要求をめぐる物語が解きほぐされてからだが、実母になりすまし、自分のエゴのために息子の運命を支配しようとする構図は、千代子の顔色を窺いながら言いなりになっていた宵子と母の期待に抗おうとする須永とを重ねさせるものである。

「雨の降る日」において、御仙から宵子を奪い取る千代子の暗闘を読むとき、直接的に語られることのなかった須永の母（養母）と御弓（実母）の物語が浮かび上がってくる。[11] この問題を各断章の男たちの語りと対照したとき、これまで構成上の亀裂と見なされてきた「雨の降る日」が、テクスト全体を結びつける核になっていることが見えてくるはずである。

二、侵食する語り

「風呂の後」から「松本の話」に至るまで、個々の断章にはそれぞれの作中人物による解釈が提示されている。ただし、その解釈にはすでに第三者によって語られた批評や期待が織り込まれているのである。たとえば、森本が敬太郎を冷やかした〈教育ある者の不自由〉をめぐる見解は、そのまま敬太郎自身の現代批評として須永の前で披露されている。また、職を得るための奔走に焦り、田口や須永に腹を立てていた敬太郎の姿勢は、須永の母による田口への好意的な評価によって一変するのである。このように、一人称の語り手でなくても、そこには誰かが話した物語（話）が伝わっていくことの効果が表れている。誰かの話が、ほかの誰かの思考や価値基準に織り込まれていく過程が、話を聴いてまわる敬太郎の営みを通して示されるのである。その上で重要なことは、各章に織り込まれた「個人の語り（話・評価・期待）」が連鎖するように個々の断章を結びつけていることだ。

「貴方なんざあ、失礼ながら、まだ学校を出た許で本当の世の中は御存じないんだからね。いくら学士で御座いの、博士で候のつて、肩書ばかり振り廻したつて、僕は慴えない積だ。此方やちやんと実地を踏んで来てゐるんだもの」と、さつき迄教育に対して多大の尊敬を払つてゐた事は丸で忘れた様な風で、無遠慮な極め

付け方をした。さうかと思ふと噫の様な溜息を洩らして自分の無学をさも情なささうに恨んだ。

「まあ手つ取り早く云やあ、此世の中を猿同然渡つて来たんでさあ。斯う申しちや可笑いが、貴方より十層倍の経験は慥かに積んでる積です。それでゐて、未だに此通り解脱が出来ないのは、全く無学即ち学がないからです。尤も教育があつちや、斯う無暗矢鱈と変化する訳にも行かないやうなもんかも知れませんよ」

（「風呂の後」七、傍線引用者）

「――尤も貴方見たいに学のあるものが聞きあ全く嘘のやうな話さね。だが田川さん、世の中には大風に限らず随分面白い事が沢山あるし、又貴方なんざあ其の面白い事に打つからう〳〵と苦労して御出なさる御様子だが、大学を卒業しちやもう駄目ですよ。いざとなると大抵は自分の身分を思ひますからね。よしんば自分でいくら身を落す積で掛かつても、まさか親の敵討ぢやなしね、さう真剣に自分の位地を棄てて漂浪するほどの物数奇も今の世にはありませんからね。第一傍がさう為せないから大丈夫です」

（「風呂の後」九、傍線引用者）

森本のこの発言は、敬太郎本人に対する批評というよりも、〈教育のある者〉一般に向けた不平である。ここから、森本の高等教育を受けた者への嫉妬と引け目が確認できる。だが、さらに重要なことは、森本が自らの劣等感を覆い隠すために行った冷やかしが、次章の「停留所」において、敬太郎自身の言葉として語られていることである。

「糊口も糊口だが、糊口より先に、何か驚嘆に価する事件に合ひたいと思つてるが、いくら電車に乗つて方々歩いても全く駄目だね。攫徒にさへ会わない」などと云ふかと思ふと、「君、教育は一種の権利かと思つてゐたら全く一種の束縛だね。いくら学校を卒業したつて食うに困るやうぢや何の権利かこれ有らんやだ。夫ぢや位地は何うでも可いから思ふ存分勝手な真似をして構はないかといふと、矢つ張り構ふからね。厭に人を束縛するよ教育が」と忌ま〳〵しさうに嘆息する事がある。

（「停留所」一、傍線引用者）

先の森本の言葉をなぞるようなこの発言は、須永の前で得意げに披露されている。「停留所」の冒頭には、「幾何でも出世の世話をして」くれる親類がありながら、身の振り方を決めようとしない須永に敬太郎が「反抗心」を抱く様子が語られている。「風呂の後」において、敬太郎は手ごたえのない「糊口」のための運動に徒労を感じていたはずだが、須永の前では、「糊口より先に、何か驚嘆に価する事件に合ひたい」のだと見栄を張り、それを阻むものとして「教育」を持ちだしている。敬太郎が森本からの受け売りを利用するのは、「糊口」にこだわっていないことをアピールするためにほかならない。教育の有

無で互いの線引きをし、敬太郎を妬んだ森本の不平が、「為になる親類」の有無によって須永を妬む敬太郎のエクスキューズとして受け継がれているのである。

このような自らの劣等感を誤魔化すための語りは各章に散見される。「報告」では、松本による田口への批評が、「須永の話」、「松本の話」では須永と松本による互いの批評が次のように語られている。

「夫が余裕のある証拠ぢやないでせうか」

「余裕つて君。――僕は昨日雨が降るから天気の好い日に来て呉れつて、貴人を断わつたでせう。其の訳は今云ふ必要もないが、何しろそんな我儘な断わり方が世間にあると思ひますか。田口だつたらさう云ふ断り方は決して出来ない。田口が好んで人に会ふのは何故だと云つて御覧。田口は世の中に求める所のある人だからです。つまり僕の様な高等遊民でないからです。いくら他の感情を害したつて、困りやしないといふ余裕がないからです」

（「報告」九）

松本は、田口を「役には立つが頭の成つてゐない男」だと罵り、自分と田口の相違点が〈精神的な余裕〉の有無にあると述べる。この批評は、「私や学問がないから、今頃流行るハイカラな言葉を直忘れちまつて困るが」（「報告」七）と断る田口自身のエクスキューズとも符合する。敬太郎が田口や松本と対面することで浮き彫りになるのは、事業に成功し、年中忙しくしている田口に対して、松本が批判的なまなざしを向けていること、それを田口自身も意識していることである。ここで留意すべきことは、松本が田口の内面を饒舌に語り、断言している点である。

「田口は僕の義兄だから、斯う云ふと変に聞えるが、本来は美質なんです。決して悪い男ぢやない。唯あゝして何年となく事業の成功といふ事丈を重に眼中に置いて、世の中と闘かつてゐるものだから、人間の見方が妙に片寄つて、此奴は役に立つだらうかとか、此奴は安心して使へるだらうかとか、まあそんな事ばかり考へてゐるんだね。（中略）其処が田口の田口たる所なんだから」

敬太郎は此批評で田口といふ男が自分にも判切呑み込めた様な気がした。けれども斯ういふ風に一々彼を肯はせる程の判断を、彼の頭に鉄椎で叩き込む様に入れて呉れる松本は抑何者だらうか、其点になると敬太郎は依然として茫漠たる雲に対する思ひがあつた

（「報告」十四、傍線引用者）

「田口の性格」に対する松本の批評は、たしかに敬太郎の疑問に答えるものだった。しかし敬太郎は、松本がなぜ田口が何を考え、何を不安に感じているのかについて断言し、他人に「叩き込む様に」語ることができるのか疑問を抱いている。それにもかかわらず、松本による一連の田口評を聞いた後では、敬太郎自身もそれを認めざるをえな

くなるのである。だが、松本による批評に思考を絡めとられた人物は敬太郎だけではない。

「須永の話」において、須永が語り出すきっかけは、千代子を貰う気はないのかという敬太郎の問いから始まる。「敬太郎が予期したよりも遙かに長」い須永の話は、敬太郎の問いに答えないまま、〈幼少期の疑問〉や〈鎌倉からの逃走〉など、いくつもの「横道へ外れ」ている。話の中心は須永を取り巻く親族内の事情だが、そこには、松本が須永に向けた言葉が繰返し織り込まれているのだ。須永は不自然なほど千代子の純真さを賛美するが、それは千代子を「猛烈過ぎる」と評した松本の眼識を一蹴することでもある。自分が千代子から軽蔑される理由、高木への「名伏し難い」感情の意味づけなど、須永は話題が重要な問題にさしかかるごとに、その因果関係を松本に教えられた言葉や枠組みに回収してしまうのである。

口の悪い松本の叔父は此姉妹に渾名を付けて常に大蝦蟆と小蝦蟆と呼んでゐる。二人の口が唇の薄い割に長過ぎる所が銀貨入れの蟇口だと云つては常に二人を笑はせたり怒らせたりする。是は性質に関係のない顔形の話であるが、同じ叔父が口癖の様に此姉妹を評して、小蟇はおとなしくつて好いが、大蟇は少し猛烈過ぎると云ふのを聞く度に、僕はあの叔父が何う千代子を観察してゐるのだらうと考へて、必ず彼の眼識に疑ひを挟さみたくなる。千代子の言語なり挙動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野な所を内に蔵してゐるからではなくつて、余り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げ掛けるからだと僕は固く信じて疑がはないのである。（「須永の話」十一、傍線引用者）

須永は繰返し松本の眼識を否定している。この章の終盤、須永は「あの叔父の様なのは偉く見える人、高く見せる人と評すれば夫で足りてゐると思ふ」（「須永の話」三十三）と述べ、その人格を露骨に批判している。この須永による執拗な松本批判は、「松本の話」における須永の不信感と結びついており、「自分は何故斯う人に嫌はれるんだらう」、「現にさういふ叔父さんからして僕を嫌つてゐるぢやありませんか」（「松本の話」三）と語る須永に対して、松本は次のように答えている。

「おれは御前の叔父だよ。何処の国に甥を憎む叔父があるかい」

市蔵は此言葉を聞くや否や忽ち薄い唇を反らして淋しく笑つた。僕は其淋しみの裏に、奥深い軽侮の色を透し見た。自白するが、彼は理解の上に於いて僕よりも優れた頭の所有者である。僕は百も夫を承知でゐた。だから彼と接触するときには、彼から馬鹿にされるやうな愚を成るべく慎んで外に出さない用心を怠らなかつた。けれども時々は、つい年長者の傲る心から、親しみの強い彼を眼下に見下して、浅薄と心付ながら、其場限りの無意味に勿体を付けた訓戒などを与える折も無いではなかつた。賢い彼は

僕に恥を掻かせるために、自分の優越を利用するほど、品位を欠いた所作を敢てし得ないのではあるが、僕の方では其都度彼に対する此方の相場が下落して行くやうな屈辱を感ずるのが例であつた。（「松本の話」四、傍線引用者）

松本は、自分が須永の知性に劣等感を抱いていること、それを須永自身に見抜かれ、軽蔑されることを恐れていたことを敬太郎に「自白」している。しかし、須永と対面していたその時、松本は自分の劣等感や恐れを覆い隠すために須永の人格を「僻み」という言葉で貶めていた。先の引用を振り返れば、須永に劣等感を抱き、僻んでいたのは松本だとわかるのだが、松本は自分の疚しい一面を須永に背負わせるのである。

「御前は相応の教育もあり、相応の頭もある癖に、何だか妙に一種の僻みがあるよ。夫が御前の弱点だ。是非直さなくつちや不可ない。傍から見てゐても不愉快だ」

「だから叔父さん迄僕を嫌つてゐると云ふのです」

僕は返事に窮した。自分で気の付かない自分の矛盾を今市蔵から指摘された様な心持もした。（「松本の話」四）

自らの矛盾を須永に指摘され、返事に窮した松本は、須永の出生を打ち明けることによって自分が須永を嫌悪しているか否かという問題を棚上げにする。ここで松本は巧みに問題の中心をずらし、たたみかけることによって、須永に「僻み」という一語を呑み込ませている。

「おれは左う思ふんだ。だから少しも隠す必要を認めてゐない。お前だつて健全な精神を持つてゐるなら、おれと同じ様に思ふべき筈ぢやないか。もし左う思ふ事が出来ないといふなら、夫が御前の僻みだ。解つたかな」（「松本の話」六）

松本は須永の出生の秘密を語り、彼ら母子の関係が血縁の有無で「差支え」が生じるわけがないと断言する。「おれは左う思ふ」と断り、個人的な見解を述べていたはずの松本が、「健全な精神を持つてゐるなら」自分と同じように考えなくてはおかしいと諭している点に、松本の語りの危うさが表れている。すでに「須永の話」を聴いている敬太郎にとって、「松本の話」における二人の衝突と関係の回復の物語は、非常に偏った物語として受け止められたはずだ。ここに須永が繰返し松本の眼識を否定する理由が見えてくるだろう。須永は松本の眼識を否定することで、松本の劣等感や恐れを隠すために捻じ曲げられた自己像を己の言葉で再構築しようと試みているのである。「斯う云つても人には通じないかもしれないが」、「僕に云はせると」（「須永の話」十二）など、須永は個人的見解であることを何度も断りながら、自らを物語っている。

僕は自分と千代子を比較する毎に、必ず恐れない女と恐れる男といふ言葉を繰り返したくなる。仕舞にはそれが自分の作つた言葉でなくつて、西洋人の小説に其儘出てゐる様な気を起す。此間講釈好きの松本の叔父から、詩と哲学の区別を聞かされて以来は、恐れない女と恐れる男といふと、忽ち自分に縁の遠い詩と哲学を想ひ出す。叔父は素人学問ながら斯んな方面に興味を有つてゐる丈に、面白い事を色々話して聞かしたが、僕を捕まへて「御前のような感情家は」と暗に詩人らしく僕を評したのは間違つてゐる。僕に云はせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思ひ切つた事の出来ずに愚図々々してゐるのは、何より先に結果を考へて取越苦労をするからである。千代子が風のごとく自由に振舞ふのは、先の見えない程強い感情が一度に胸に湧き出るからである。彼女は僕の知つてゐる人間のうちで、最も恐れない一人である。だから恐れる僕を軽蔑するのである。

（「須永の話」十二、傍線引用者）

須永は松本の眼識を否定しているにもかかわらず、千代子が自分を軽蔑する理由を松本に教わった「詩と哲学の区別」によって説明している。同じように、高木への「名伏し難い」感情も、「落ち付いた今の気分で其時の事を回顧して見ると、斯う解釈したのは或は僕の僻みだつたかも分らない」（「須永の話」十六）と、かつて松本に示された言葉によって意味づけている。敬太郎に答えるべき「千代子との結婚を回避せざるをえない理由」は結局、松本が用意した枠組みの中でしか語られていないのだ。家族にすら、あるいは家族だからこそ語ることができなかった混乱や気分を、敬太郎を前にしてようやく語り始める〈今〉でさえ、須永の内省的発話は松本が語った評価軸に絡め取られているのである。

このように、発話者の価値基準に侵食し、ときに喰い破るような「個人の語り」は、反目し合う男たちのエクスキューズの連鎖を浮かび上がらせている。各断章において、男たちの劣等感や恐れを覆い隠す言い訳は、別の誰かへの批判的評価として語られていた。この批評が、「話を聞くもの」の価値基準に織り込まれ、伝達されるのである。『彼岸過迄』の断片は、男たちの「凝結した形にならない嫉妬」の連鎖によって結びついているのである。

三、映し出される母の暗闇

「僕に僻があるでせうか」、「ぢや左ういふ弱点があるとして、其弱点は何処から出たんでせう」（「松本の話」四）と、須永はその起源を問う。松本によって刷り込まれた「僻み」という表現を、須永は次のように受け止めている。

「落ち付いた今の気分で其時の事を回顧して見ると、斯う解釈したのは或は僕の僻みだつたかも分らない。僕はよく人を疑ぐる代

りに、疑ぐる自分も同時に疑がはずにはいられない性質だから、結局他に話をする時にも何方と判然した所が云い悪くなるが、若し夫が本当に僕の僻み根性だとすれば、其裏面には未凝結した形にならない嫉妬が潜んでゐたのである」

（「須永の話」十六、傍線引用者）

高木と自分とを比較する際に抱く「名伏し難い」感情を、須永は「僻み根性」や「嫉妬」と呼んでみる。だが、このように次々と別の言葉に言い換えられること自体が、須永が自分の表現に確信がもてず、言葉の選択に迷っていることを裏づけている。どうにも表現しがたく把握しかねる感情に対して、自分なりの解釈によってこれを「捕まへる」ためには、まず既存の「型」を当てはめてみるしかない。ここでいう既存の「型」とは、すでに誰かに教えられた言葉や概念、思考の枠組みである。[12] ここに、松本から聴かされた「話」が侵入するのである。これまでの分析で確認してきた男たちの「語り（話）」は、各々の「ぐにゃ〳〵した」感情を隠すために生じる過剰な〈語り／騙り〉だった。では、彼らの歪な語りを引き起こす「不安」は、どこから生じてきたのだろうか。

『彼岸過迄』における個人の不安は、千代子と須永の縁談と遠く連なっている。たとえば、千代子の結婚をめぐる不安は、千代子を須永の嫁にするという親たちの口約束に起因している。しかし、この約束は須永の母の申し出によるものであって、須永の父と田口との間で正式に交わされたものではない。須永と千代子の縁談は、須永家に血のつながりを得ようとする須永の母の不安から生じたものだ。そして、この縁談をめぐる不安が、御仙から子を奪う〈母になる遊び〉に千代子を走らせ、田口の細君による曖昧な態度が、夫たる資格の有無をめぐる劣等感を須永に意識させている。さらに、縁談をめぐる須永の不安は彼の進路を宙づりにし、それを眺める敬太郎に就職をめぐる不安や「反抗心」を抱かせている。このように、『彼岸過迄』の各断章に散りばめられた個人の不安は、須永の母のエゴイスティックな不安に結びついているのである。二人を結びつけようとする須永の母の要求は、ビリヤードの最初の一突きのように各断章の男たち・女たちの不安に屈折した衝突を引き起こしている。その連続が、「雨の降る日」における千代子の〈遊び〉から見えてくるのである。

「雨の降る日」は、千代子の「話」が三人称の語りを通して提示されることによって、千代子が見せたがらない部分――「技巧」の裏側にある彼女の不安が垣間見える。それは読者だけの問題ではない。繰返し千代子の話を耳にしていたであろう須永にも、新たな発見をもたらしたはずだ。宵子の死後、須永は松本から実母の名と自分の出自を教えられている。須永は「雨の降る日」の話を聴いた直後に自らの経験を語り出し、「須永の話」のあちこちに千代子と須永の母を重ね見る言葉を用いている。松本から聴かされた実母と養母の関係を一つの「型」として、須永は御仙から宵子を取り上げる千代子のパフォーマンスに、かつて須永の母と御弓の間生じたはずの子をめぐる争いを重

ね見たのではないだろうか。「松本の話」から「雨の降る日」までの錯時的な物語の構造を須永が聴いた「話」の順に編み直すとき、そこには千代子の行為に映し出された須永の母の不安が、〈今〉に食い込む過去の物語として立ち現われてくる。

千代子の不安の二重写しとなっている須永の母の不安は、他人の子を強引に自分の子として取り込むことから始まっている。それは、須永家に自らの確固たる立場を得るためばかりではない。男子を引き取り、わが子として育てることは、須永家を存続させ、松本家の文化を継承させるためでもある。[13] しかし、須永の出生の事情を隠し続けるということは、須永家から御弓の存在を記憶とともに抹消することだ。これは御弓に二度目の死をもたらしている点で、御弓にも、須永にも残酷だが、女が女を排除するこの闘いは、男たちの〈家〉の継承にともなうものである。なぜなら、男たちの〈家〉の継承は、女たちの腹を通して血が結びつくことで達成されるからだ。「子の出来ないのを苦にしてゐた」須永の母にとっては、身籠る女である御弓が家庭内に存在することも、須永家の血を引く男子の母として家庭外に存在することも脅威である。子を奪い、奪われる女たちの関係は、男たちの制度に要求された避けがたい闘いなのだ。

『彼岸過迄』の記述は、男たちの意識に重点が置かれているが、「雨の降る日」で語られる千代子の不可解な行動を男たちが語った出来事に照らし返してみると、そこには男たちの不安とともに生じる女たちの不安が前景化してくる。千代子による、周りを犠牲にするような遊びは、千代子を中心とした直接語る場を持たない女たちの暗闘を映し出す媒介なのだ。

母も其時にはたゞ遠くから匂はせる丈でなくて、自分の希望に正当の形式を与える事を忘れなかつた。僕は何心なく従妹は血属だから厭だと答へた。母は千代子の生れた時呉れろと頼んで置いたのだから貰つたら可いだらうと云つて僕を驚ろかした。何故そんな事を頼んだのかと聞くと、何故でも私の好きな子で、御前も嫌ふ筈がないからだと、赤ん坊には応用の利かない様な挨拶をして僕を弱らせた。段々其処を押して見ると、仕舞に涙ぐんで、実は御前の為ではない、全く私の為に頼むのだと云ふ。しかも何うして夫が母の為になるのか、其理由は幾何聞いても語らない。最後に何でも蚊でも千代子は厭かと聞かれた。僕は厭でも何でもないと答へた。

（「須永の話」六、傍線引用者）

「従妹は血属だから厭だ」と主張する須永に対して、須永の母の回答は的を射ていない。ただ自分の言うとおりにしろと訴えるだけなのだ。千代子と須永の母の共通項がここにある。千代子もまた、宵子や須永をコントロールすることで自らの不安を解消しようとしていた。

「貴方それを描いて下すつた時分は、今より余程親切だつたわね」

千代子は突然斯う云つた。僕には其意味が丸で分らなかつた。

画から眼を上げて、彼女の顔を見ると、彼女も黒い大きな瞳を僕の上にじつと据ゑてゐた。僕は何ういふ訳でそんな事を云ふのかと尋ねた。彼女はそれでも答へずに僕の顔を見詰てゐた。やがて何時もより小さな声で「でも近頃頼んだつて、そんなに精出して描いては下さらないでせう」と云つた。

……中略……

「夫でも能く斯んな物を丹念に仕舞つておくね」

「妾御嫁に行く時も持つてく積よ」

僕は此言葉を聞いて変に悲しくなつた。さうして其悲しい気分が、すぐ千代子の胸に応へさうなのが猶恐ろしかつた。僕は其刹那既に涙の溢れさうな黒い大きな眼を自分の前に想像したのである。

（「須永の話」十、傍線引用者）

この日、千代子は「親切だつた」証として須永が描いた絵を出して見せ、それを嫁いだ先に持って行くつもりだと述べたり、ほかの相手との結婚が「もう極つた」と嘘をついてみたりしている。この駆け引きによって、「千代子の嫁に行く行かない」が須永に「何う影響するか」を想像させ、自覚させることに成功している。千代子が須永に想像させることは、須永を思い通りに動かすための方法なのだ。この手法が最も成功している場面が次の引用である。

千代子が縁伝ひに急ぎ足で遣つて来て、僕に一所に電話を掛けて呉れと頼んだ。

……中略……

「もう呼び出してあるのよ。妾声が嗄れて、咽喉が痛くつて話がで出来ないから貴方代理をして頂戴。聞く方は妾が聞くから」

僕は相手の名前も分らない、又向うの話の通じない電話を掛けるべく、前屈みになつて用意をした。千代子は既に受話器を耳に宛てゝゐた。それを通して彼女の頭へ送られる言葉は、独り彼女が占有する丈なので、僕はたゞ彼女の小声でいふ挨拶を大きくして訳も解らず先方へ取次ぐに過ぎなかつた。夫でも始の内は滑稽も構わず暇が掛るのも厭わず平気で遣つてゐたが、次第に僕の好奇心を挑発する様な返事や質問が千代子の口から出て来るので、僕は曲んだ儘、おい一寸とそれを御貸と声を掛けて左手を真直に千代子の方へ差し伸べた。千代子は笑ひながら否々をして見せた。僕は更に姿勢を正しくして、受話器を彼女の手から奪はうとした。彼女は決して夫を離さなかつた。取らうとする取らせまいとする争ひが二人の間に起つた時、彼女は手早く電話を切つた。さうして大きな声を揚げて笑ひ出した。——

（「須永の話」十、傍線引用者）

千代子の声だけを頼りに、須永は囁かれた言葉をその通りに反復せざるをえない。それは千代子の指示のままに動かされていた宵子を髣髴させるものである。千代子は須永の「好奇心を挑発する」言葉を口

にすることで、彼の屈めていた身体を起こし、千代子に向かって動き出させることに成功している。そして、千代子は演出したその空間のからくりが知られる前に電話を切ってしまうのである。須永はたしかに千代子のパフォーマンスに翻弄され、その「技巧」に釣られそうになっている。しかし、千代子も須永の母も、自分たちが用意した舞台や演出の裏側を須永に見せることはないのである。

『彼岸過迄』には演劇性を示す言葉が散見される。高木を意識せずにいられなかった鎌倉での数日間、須永が最も恐れていたことは、知らぬうちに自分が誰かによって用意された「舞台」で配役され、演出されることである。須永は、「意味ある劇の大切な一幕」において、「自分の務めなければならない役割」（「須永の話」二十二）があるのではないかと疑い、鎌倉から逃げるようにして帰宅するが、それを追いかけてきたのは須永の母と影のように寄り添った千代子だった。須永はすでに、彼女たちが用意した舞台の上に立っているのである。

「浪漫的な」出来事を渇望し、探偵めいた行為に魅せられていた敬太郎が、「露骨に此方から話し掛けて、当人の許諾を得た事実」を聞き出すことに目覚めるのは、面接試験を兼ねた田口への「報告」がきっかけだった。敬太郎が探偵的行為の舞台から降りてみて発見した方法は、人知れず秘密を探るより、直接尋ねる方が合理的だということである。これに対し、無口を強みとしていた須永は、鎌倉での一件や、松本との衝突以降、自ら語らなくては他人の都合の良いストーリーに自分が絡め取られること、自分自身が喰い破られてしまうことに気づいている。だからこそ、親族以外の人間――用意された「舞台」の外に向かって、自らの経験を語り始めるのである。

おわりに――「怪物」の起源

自らの不安を覆い隠すために行われる〈物語ること〉、〈演じること〉は、性差を問わず、『彼岸過迄』の作中人物に共有されている。だが、男たちが自分に都合の良い物語を語るのに対して、女たちは男たちほど自由には語れない。実際はどうであれ、彼女たちは「技巧」とは縁遠く、「美しい心」をもった女性であり、「慈母」でなければならないからである。そこで千代子が行ったことは、都合の良い〈劇（ドラマ）〉に周囲の人間を誘い込むことだ。自分だけが脚本を手にし、自ら演じ、演出することによって、聴きたい言葉を他人の口から引き出すのである。男たちが批評という体裁をとり、過剰に語ることで暗闘を行うのに対し、語りの場が限られている女たちは語らずに見せること、巻き込むことによって自分の要求を通していく。自らの自信のなさのために、それを掻き消す欲望に憑りつかれた「ぐにゃ〳〵した怪物」とは、須永が「鏡」に映して突き刺すべき対象である。それが、須永のあらゆる不安の源である母の正体なのだ。自らの不安を掻き消すために他人を犠牲にする須永の母の方法は、自分の劣等感を覆い隠すために誰かを批判する男たちの語りの構造の根幹でもある。千代子のふるまいを通して浮かび上がる二人の母の暗闘が、男たちの語りの奇妙な相互浸

透の遠い源になっているのだ。

しかし、忘れてはならないことがある。二人の母による暗闘の起源は、須永の父が犯した過ちにあった。男たちの関係が相互的である以上、本当の起源を決めることはできない。そこで本稿では、小説中の〈現在〉に現れた限りにおいての起源を二人の母の暗闘に求めた。だが、『彼岸過迄』において半ば公然の秘密と化している二人の母の子をめぐる争いは、作中人物のほとんどに知られているにもかかわらず、表立って語られることがない。二人の母の物語が語られないことが、いわばテクストの「空所」[14]として機能しており、この小説の各断章を結びつけて屈折した運動をもたらしているのである。この〈語られなかった物語〉を映し出すスクリーンとして千代子のパフォーマンスを読み直すとき、「雨の降る日」が『彼岸過迄』における〈空虚な中心〉として浮かび上がってくる。

注(1)　小宮豊隆「『彼岸過迄』」『夏目漱石 三』岩波書店、一九五三・一〇、酒井英行「『彼岸過迄』の構成」『国文学研究』第七十五集、一九八四・一〇、内田道雄「『彼岸過迄』再考」『古典と現代』五五号、一九八七・九（いずれも、のち『漱石作品論集成 第八巻 彼岸過迄』桜楓社、一九九一・八所収）など。

(2)　それまで前半と後半の断絶が繰り返し指摘されていた先行研究の中で、話し手と聞き手の相互作用からそれらを結びつけた論に工藤京子「変容する聴き手―『彼岸過迄』の敬太郎」（『日本近代文学』第46集、一九九二・五）、前半・後半を結びつける要素として繰り返し現れるモチーフに着目した論に井内美由起「「白い襟巻」と「フラ子ル」―『彼岸過迄』論―」（『日本近代文学』第81集、二〇〇九・一一）、藤澤るり「『彼岸過迄』論―対象化する領域、された領域―」（『国語と国文学』八十七巻七号、二〇一〇・七）がある。

(3)　「雨の降る日」を作家漱石の「創作上の失敗」や「千代子の語りの抑圧」として意味づける論（中村直子「『彼岸過迄』―その関係性の物語―」『東京女子大学紀要論集』41巻2号、一九九一・三、山下航正「「彼岸過迄」論―〈導入〉としての高等遊民―」『近代文学試論』第三十九号、二〇〇一・一二）や「雨の降る日」を中心化して論じた先行研究（「《雛》の運命―『彼岸過迄』論―」『魔術としての文学―夏目漱石論―』沖積舎、一九八七・一〇、野網摩利子『夏目漱石時間の創出』東京大学出版会、二〇一二・三）などはこれまでにも提出されている。しかし、「雨の降る日」を『彼岸過迄』全体の主軸として位置づけ、その連続を具体的に論じたものはない。田中愛氏による「『彼岸過迄』論―「雨の降る日」の悲劇と千代子との関わりを中心に」（『迷羊のゆくえ―漱石と近代』熊坂敦子編、翰林書房、一九九六・六）は、「雨の降る日」をテクスト全体の要として位置づけようと試みているが、あくまで女性をめぐるモチーフの連なりを「イメージ上の連鎖」として読み取るに留まっている。これに対し、本稿では、男たちの語りの連鎖を具体的に論証し、互いの批評が侵食し合う語りの根幹に「雨の降る日」における子をめぐる母の争いが関わっていることを論じる。

(4)　前出・山下航正「「彼岸過迄」論―〈導入〉としての高等遊民―」

(5)　勝田和學「『彼岸過迄』の構造」『文学論藻』第六十二号、一九八三・二。

(6)　ジャン・ピアジェは、ままごとなどの「ごっこ遊び（make believe）」とともに、眠るふりなどの「ふり行動（pretending）」を幼児の発達段階における重要な指標とみなしている（ジャン・ピアジェ『遊びの心理学』大伴茂訳、黎明書房、一九八八・一一）。前者は、日本の〈見立て〉の概念と一致する。AをBとみなすこの行為が充実することによっ

て、ごっこ遊びはより豊かなものとなる。

（7）高木文雄氏は、宵子に芸を強いる千代子の態度に「支配せずにはいられない気持ち」があることを指摘している（『新版 漱石の道程』審美社、一九七二・三）。

（8）この夜、「何ういふ考へか、突然」、須永は田口に別室に招かれている。千代子の結婚問題をめぐる田口と須永の談判の意味については、拙稿「期待される男たち―夏目漱石『彼岸過迄』論―」（『日本近代文学』第89集、二〇一三・一一）にて論じた。

（9）秋山公男「『彼岸過迄』試論―「松本の話」の機能と時間構造」『国語と国文学』五八巻二号、一九八一・二（のち『漱石作品論集成 第八巻 彼岸過迄』桜楓社、一九九一・八所収）、酒井英行「『彼岸過迄』の構成」（前出）。

（10）ダニイル・ボリソヴィチ・エリコニンは、子どもがある遊びの状況のなかで他の人々の役割を引き受けるとき、あるもののもつ意味を違ったものに転移することが、引き受けた役割の典型的な行為や態度をやって見せる「想像の場面」を支える重要な要素であることを指摘している（『遊びの心理学』天野幸子、伊集院俊隆訳、新読書社、一九八九・二）。

（11）野網摩利子氏は「松本の話」を中心に須永が訪れる土地の歴史的宗教的痕跡を辿ることで、生き遺された須永による実母への「情緒」を論じている（「「情緒」による文学生成―「彼岸過迄」の彼岸と此岸」『文学』第十三巻第三号、二〇一二・五）。

（12）「……ではなく……でもない」といった具合に、少しでも的確な表現を当てはめて現実を解釈しようとすることを、茅野修氏は〈見立て〉の第一段階だと述べる。氏はこれを「見立て／思いめぐらし／見顕し」の三つの段階に分類し、個人の発話における〈見立て〉の効果を「状況認識」のためのモデルとして抽出した（「「見立て」の政治学 状況を読み解く知性の「技」」東洋経済新報社、一九九六・二）。

（13）この点についてはすでに指摘がある（前出・坂口曜子「《雛》の運命―『彼岸過迄』論―」）。

（14）ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書―美的作用の理論』轡田収訳、岩波書店、一九八二・三。

付記

本稿は、早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号2013A-846）による研究成果の一部である。なお、本文の引用は春陽堂より発刊された単行本（一九一二・九）の復刻版『彼岸過迄』（日本近代文学館、一九七六・六、第一版）に拠り、適宜旧字を新字に改めルビを省略した。